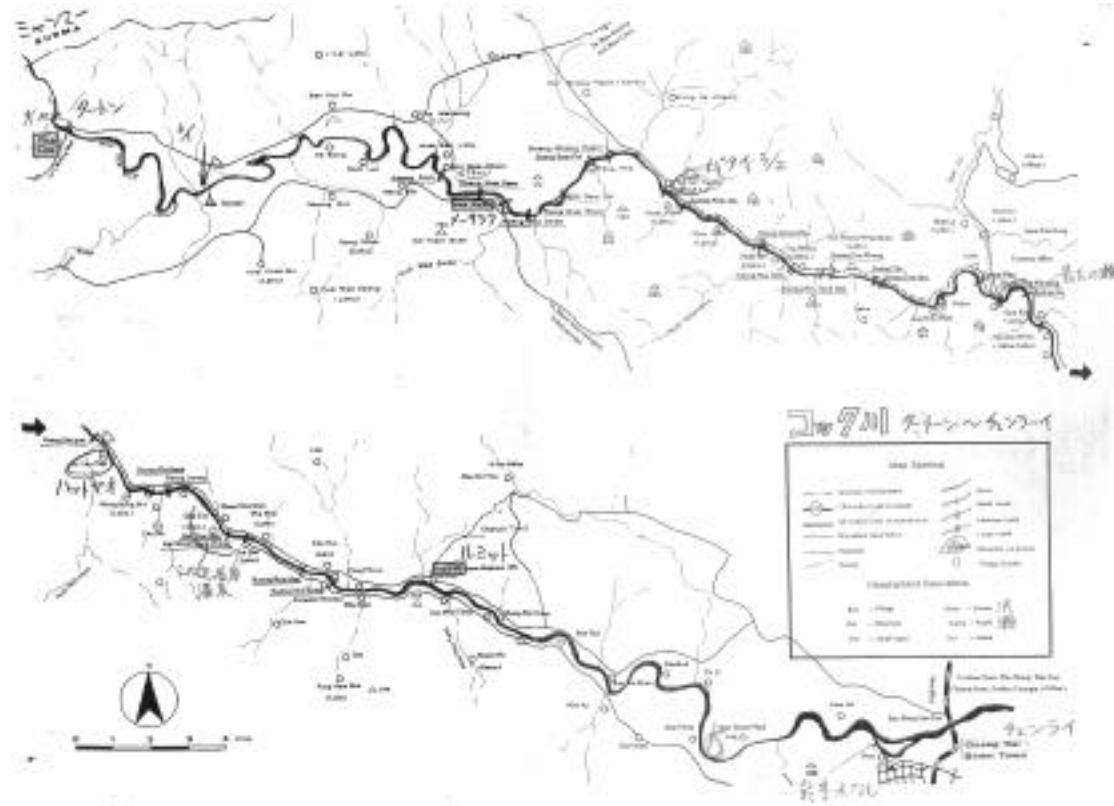


タイで タイ人に タイを 食わせる

タイ・コック川
リバーツーリング

文、福島覚



全員ライジャケ着用というやる気満々の姿で飛行機に乗り込んだ。周りの人の視線が忘れられない。ほり欠けているが・・・落ちて大丈夫さ・・・

- タイ・コック川リバーツーリング隊
- 隊長 仲丸潤（法律2年）
 - 副隊長 山本信之（電気2年）
 - 渉外 小島基史（機工1年）
 - 会計 堀内寛晃（建築1年）
 - 医療 佐羽正寛（経済1年）
 - 装備 松本豪（法律1年）
 - 食料 佐藤晋（法律1年）
 - 記録 福島覚（法律1年）



コック川を下る

なぜコック川というマイナーな川を下るのか。それは以前この地方を旅した当時3年の後藤圭さんが、「あの川ならラフトで下れる」という情報を我々にもたらし、そんなら下ってやれということになったらしい。今のところそれ意外にコック川を選んだ理由はないようであるが、まあいいじゃないか。

コック川はミャンマーに源を発する大河メコンの支流である。タイ・ミャンマー国境からチェンライまで主に山間部を流れ、チェンライからメコンの合流までは平坦な農業地帯をゆく。タイ国内での長さは約120キロあり、チェンライはそのほぼ中央にある都市である。我々が行ったときは最も暑く乾燥した夏季だったが水量は安定していた。水温も気温の割には低めようである。川の流れはゆったりとしたもので、瀬も日本という早瀬程度。特に危険な箇所はない。山間部には多くの山岳少数民族が居住しており、その村を訪れるツアーも盛んである。

装備の日々

2月24日、いよいよ出発の日である。佐藤がパスポートを忘れるという事件があったものの無事手続きを済ませ、全員ライジャケ着用というやる気満々の姿で飛行機に乗り込んだ。周りの人の視線が忘れられない。

翌日空港から出た途端熱気に襲われる。昨夜クーラーの効いた館内で寝ていたのに「タイもそんなに暑くないな」と勘違いしていたのだった。目の前のドンムアン駅までボートを持っていったときには皆すっかり汗だくになった。やって来たバンコク・ファランボーン行きの列車はやたらと込んでおり、でかい荷物を持った八人組は肩身の狭い思いをしたうえ車掌にしっかりボートの荷物料とし



ありがとう・材木屋さん

いざ下るぜ!

3/1

1000パーツでソントウ(ミニバス)を雇ってタートンへ向かう。タートンはミャンマー国境のすぐそばの小さな町で、今回のリバーツーリングの超点である。野菜と水を買ひ足し、ボート2艇とカヤック1艇は15時ごろいよいよコック川を下りだした。この辺の風景は日本とよく似ている。地元の人が

て40パーツ取られてしまった。バンコクでチェンマイ行きの急行に乗換え翌日早朝にチェンマイに着き、早速準備に取りかかる。泊まったゲストハウスにTAT(タイ政府観光庁)公認のガイドがいたのできいてみると、川を下るならガイドを付けないと警察のチェックにひっかかるという。事前の調べでは川を下るのに特別な許可はいらないということだったがガイドを探す必要がでてきた。チェンマイを探しまわったら日本語の通じるツアー会社を見つけたので交渉してみた。すると社長のスパチャイ氏は我々の計画に興味を持ってくれ、山岳民族の村を訪れるとき交渉にあたるMr. Bというガイドを紹介してくれた。Mr. Bは

乗ったボートと何度も擦れ違う。この日は下り始めたのが遅かったため1時間半ほど下って左岸に上陸した。早速晩飯作りに取りかかる。ここでMr. Bが驚くべき行動に出た。飯を炊いている最中にいきなり鍋のふたを取って中身をかき回したのだ。あるいはそれがタイの流儀かもしれないし、出来

ツアーリスト・ボリスでもあり、山岳民族の言葉もできるという。彼は乗り気で、「俺に任せろ」という感じだった。計画を話し合ったところ、チェンライから下のコック川の様子は詳しくは分からないが、メコン合流点まで下るのは難しくないということだった。チェンライまでは2,3の村により、4泊5日を目安にすることにした。

パドルは材料を買って自分達で作るつもりだったが、製材所で「パドルを作りたいので……」というとなんと作ってくれた。これは後で黄色く塗り上げた。そして食料、水、鍋を買い込み、一日休息をいれてリバーツーリングに備えた。

上がりに特に問題はなかったのだが、我々が余りに騒ぎ立てたためか彼はそれ以来飯作りに加わらなくなってしまった。

飯を食い終わった頃ツバメの大群が暮れゆく空をおおった。夜は焚火を囲み、そして眠りに就いた。

日程

- (2/13・14相模川でプレ合宿)
- 2/24 部室 成田空港 バンコクへ
- 25 バンコク チェンマイへ
- 26~29 チェンマイ市内
- 3/1チェンマイ タートン
リバーツーリング開始
- 5 チェンライ着
- 6・7 チェンライ市内
- 8リバーツーリング再開
- 11 メコン合流点着
- 12 チェンセーン チェンライ
- 13 チェンマイ 解散 自由行動
- 21 バンコク集合
- 22 成田へ
- 23 部室 帰宅

3/2

朝起きてみると、外で寝ていたMr. Bが透明なビニール袋にくるまっていた。結構寒かったとみえるが実際朝方は冷え込む。

10時出発。少し下ったところで畑で農作業をしていた村人達がぞろぞろ見に来た。手を振ってみたが笑って手を振って来た人は少なく、だいたい「何だコイツら……」という目で見ていた。Mr. Bによると彼らは普通のタイの農民ということだ。その少し下流の山の斜面には少数民族のラフ族の家屋が張り付くように点在していた。

Mr. Bは山本のかわりにカヤックに乗り、岸に人がいるとその度に漕ぎ寄せて言葉を交わしている。途中で左岸の村によって食料を買い、食いながら下っていると警察のチェック・ポイントのあるメーサラクが見えてきた。ここに13時過ぎに上陸する。観光客を乗せた細長いボートが何双か泊まっていた、その内一雙だけ自動小銃で武装した兵士が乗っていたが、兵士の護衛のついた船を見たのはこの

時だけである。メーサラクにはチェック・ポイントのほかには食堂が一軒と民家があるだけで、1時間しないうちに出発した。川は本格的に山間部に入っていく。

4時近くになって本日の宿、ラフ族のバタイ村に到着。村の船着場にボートをつなぎ上陸する。Mr. Bが交渉して村長の家に泊めてもらうことになった。村人たちは木造の高床式の家に住んでいるが、村長の家だけはコンクリート造りの二階建てだった。この村の住人はラフ族のなかでもラフ・ナ族だという。村長の家に荷物を運び込んで玄関先で一息ついていると子供たちが集まってきた。ガイドブックに載っているラフ語で話しかけてみたが、初めはなかなか通じず子供は笑うばかりであった。また、お菓子のおまけについていた剣玉をやって見せたりやらせてみたりした。

村人たちが珍しそうに見つめるなか、火器を取りだして晩飯のラーメンを作る。そこへ村長の奥

装備

RV2000・2艇、フォールディングカヤック・1艇(山本)、キャリア・2台、ダブルアクションポンプ・1本、ライフジャケット・8着、スローロープ・2本、荷造りロープ、予備バルブ、ガソリン火器、浄水器、水タンク、その他。パドルと鍋類はチェンマイで調達。



さんが飯を炊いて洗面器いっぱい持ってきてくれた。ラーメンだけで済ませるつもりだったのでありがたく頂戴した。

食後にチェンマイから持ってきたスイカを村長たちと食べた。その後は喫煙タイムとなったが村の人はやたらとタバコを吸うのでしだいに煙が充満してきた。そのうち村長の家に村人が続々と集まってきた。すると明かりが消され、テレビのスイッチが入れられた。村人たちの目当ては村唯一のテレビだった。まず流れたのは皇太后(プミポン現国王の母)崩御のニュースで、長いCMの後なぜか突然「忍者ハットリくん」が入った。その後中国のものらしき時代劇が入り、みんなおもしろそうに見ていたが我々にはさっぱり分からない。眠くなってきたので二階に引き上げてシュラフにもぐり込む。村人たちは随分遅くまでテレビを見ていたようである。

3/3

午前3時、空の白む前から、放し飼いの犬、豚、にわとりが一同に騒ぎだした。うるさくて寝られたものではない。しかたなく早目に起きて朝飯にする。コーンフレークを食べているとそこへ村長の奥さんがまたしても洗面器いっぱいの飯を持ってきてくれた。今度は塩味のゆで小豆のようなおかずもつけてくれた。

10時過ぎに村人に別れを告げ、パタイ村を後にする。しばらく下っているとようやく瀬らしい瀬に当たった。しかし瀬といっても早瀬程度である。切り立った山々と点在する村落を眺めながら川を

下っていき、昼頃右岸の人気のない村に上陸し昼飯にする。一時間後出発し、川が大きく右に回り、逆に左に切れようとするところにまた瀬があった。ここの瀬は二段になっている大きなものだったが、結局この瀬がリバーツーリング中最大だった。

今日の宿はハットヤオ村。村の入り口に看板が出ていてすぐ分かる。村自体は川からやや奥まったところにあるので川に近い芝生の上にテントを張った。早速村人がやってきたが若干距離を置いていた。しかしおとなしそうに見えた子供たちにこの後襲撃されるので

ある。飯の後、下が芝生なので焚火はやめにしてゴロゴロ寝そべっていると子供たちがやって来て我々を取り囲んだ。そして笑いながら口々に何かしゃべるので、我々がおうむ返しにいうと喜んでた。最初は遠巻きにしていた彼らだったが、段々近づいて来て騒いだ。そこで我々は一同に立ち上がって子供たちを追い掛け回し、彼らは歓声を上げて逃げ回った。大学生と子供の追い掛けっこは2・3回続き、生意気なやつをとっ捕まえたりしていたが渡れてテントに引き上げた。しかし子供たちはなかなか帰ろうとせず遅くまで騒いでいた。



タイで、鯛焼ってなんやねん



橋に、注目！！



び~、とその仲間達



矢切りの~わた~し~
人さらいのようにも見えるんですけど、、、(編)



3/4

朝はホットケーキだったが、山本は鯛焼き器を取り出し鯛焼きを作り出した。あんはさすがにタイでは手に入らず、中身はいちごジャムである。「タイでタイ人にたい焼きを食べてもらおう」というのが彼の目論見であったようだが、警戒されたのか最初はなかなか食べてくれなかった。

出発はやや遅くなった。暑くなってきたので川に飛び込んだ。水はちょうどいい冷たさで、乾季のためか深さも足がつく程度であ

る。昼に右岸に上陸。ここには熱過ぎて入るわけにはいかないが温泉がある。Mr. Bは昨日ここまで来る予定だったという。メルヘンあふれる花畑で堀内が裸人になったのもここである。昼飯を食いながら下っていると遠くに象が見えてきた。カレン族の村ルミットである。Mr. Bにボートの見張りを頼んで巨大な象を見に行く。象は調教されて背中に観光客を乗せて歩く仕事をやらされている。そのためか表情に生彩がなく目が死んでいた。

村には土産物屋と観光客ばかりなのですぐ戻った。

ルミットから下の川の様子は今までと一変してしまった。上り下りの観光ボートがひっきりなしに通る、護岸工事をしているところもあった。川は山間部から完全に平野部に出てきた。この日は石がゴロゴロした左岸の河原に上陸。夜、焚火を囲んでチェンライから先を下るが話し合った。

3/5.6.7

5日も出発は10時半と遅かった。川は完全に平野部へ出てしまったので流れがほとんどなくうんざりした。この状態が続くのかと思うとチェンライから下を下るのにやや不安を覚えた。14時半久々の都会チェンライに到着。一旦ボートをたたみ宿へ。Mr. Bは「じゃ、後は頑張ってくれ、幸運を祈る。」といてあっさり帰ってしまった。宿で今後のリバーツーリングについて話し合ったが、川下りに少し嫌気が差していた者とどうしてもメコンの合流点まで行きたい者の互いの思惑が錯綜した。6・7日は休息、情報収集、食料などの調達に当てた。TATによるとチェンライの下7キロのところにダムがあるということだった。



寛は？カレン族の村で



それを、あざ笑う神大生



3/8

いよいよメコンへ向けて再出発である。二日前上陸したところから下り始めたが何やら重苦しい雰囲気だった。流れがなくボートはなかなか前に進んでくれない。ほとんど流れは止まり、おまけに向かい風。イライラが頂点に達する頃、流れを止めている原因のダムが見えた。それは11のゲートを持つダムというよりは水門だった。ここで一度荷物を下ろし、ボートを水門の下流側に運ばなければならなかった。

水門から下は水流は回復した。川のカーブに沿って左に曲がると異様な光景が目に移った。建築用の川砂を採取する船が密集していたのである。10数メートルおきに一隻あるという有様だ。川を下る我々にすれば非常に邪魔だった。この密集地帯を抜け、左岸に上陸。辺りに人家は見えなかったが車の走る音が聞こえた。夜になると右岸下手に明かりが見え、読経の音が聞こえてきた。

TOYOTAのハイテク技術



蓮の花咲く麗しの大地

その名をタイと名付けし・・・
微笑みの国・・・

向こうは、ラオス・メコン・GET
THE GOAL



3/9

朝、昨夜明かりが見えたところに上陸してみた。僧侶と村人が集まっていて、何か仏教の集まりがあったようである。村人が井戸水で洗いのをしていたので水を分けてもらおうと思ったがこの水は飲めないそうで、確かに硫化水素臭かったが少しもらって出発する。暑くなってきたのでライジャケを着て泳ぎだす。

代り映えのしない農場風景に飽きてきた頃、橋の工事をしている

ところがありくぐろうとしたら荷物がひっかかってしまい、荷物を一度ほどいてやっとこさくぐった。この日は追い風でどンドン進んだため2艇のボートは互いに見えなくなるほど離れてしまった。日も傾き始めた頃、村人たちが川に入って投網をやっているところに通りかかったが漁の邪魔をしてしまったようなのでそそくさと通過した。

そろそろどこか上陸しようとい

いテン場を探しながら下っていると大規模に河川改修をやっている川が極端に狭くなっているところにでた。幅が3メートルくらいしかないところをボートを押して進んだところもあった。そこを抜けると川幅はもとに戻ったが岸に泥が堆積していることが多かった。結局上陸したのは17時過ぎと遅かった。夜、まだメコンについていないのに「メコン」ウイスキーで酔っ払い、騒いだ男がいた。

3/10

朝我々が出発の準備をしていると、向こう岸から数人の村人たちが声を掛けてきた。初めはここでキャンプをしたのを怒っているのかと思ったが、どうやら我々のボートを見て川を渡してくれと言っているらしい。そこでRV20002艇で向こう岸に漕ぎ寄せ、そのおばちゃんたちを乗せて

戻った。これからどこかへ仕事に行くらしく、礼を言うと後の林へ消えていった。

そんなこともあって出発は遅くなってしまった。川が大きく右にカーブすると橋が見えた。この橋は国道が通っていてそれなりに大きいのだが、よく見ると岸との接続部が崩れ、一部の橋脚が沈んで

橋桁がへこんでいるというひどい状態だった。

風景は相も変わらず農地ばかりである。築が川の端から端まで塞いでいるところが二箇所あり、そのままでは通れないので悪いと思いつつ少し壊して通ってしまった。この日は16時半右岸に上陸。

3/11

同じような風景が続き、川も大きく蛇行して流れがないので皆飽き飽きしてきた。収穫の終わった畑を焼き払った灰が降ってきたのには閉口した。「メコンまだかよ……」とぼやきが聞こえ始めた頃目の前に橋が見えた。ここで上陸し橋に屯していた地元の青年たちに地図を見せて現在地を確認したら目指すメコンとの合流点まで3

キロ足らずであることが分かり早速ボートを漕ぎだす。

そろそろじゃないかと思いつつラストスパートをかける。川は大きく左に曲がっているように見えた。しかし曲がるうとしたとき我々の目に飛び込んできたのは、今までの川とは明らかに違うだけ広い水面だった。その湖のような水面はゆったりと流れていた。

それがメコンだった。我々は遂に来たのだ。小さな中州に上陸し、たおやかな大河を眺めつつ感慨にふけていた。今までのぼやきも消える最高の瞬間であった。我々はコック川の河口にある大きな中州に上陸した。最後の焚火を囲み、このリバーツーリングが成功のうちに終わったことを祝った。

3/12 そしてそれから

朝のうちテン場の少し下流のソップコック村に上陸し帰り支度を始める。パドルは捨てようかどうか迷ったが村の漁師が全部もらってくれた。我々は村のトラックを雇ってチェンセーンへ向かう。

しかしトラックといってもトラクターのエンジンを積んだハリボテのような車だった。8人の人間とボートやらザックやらを積み込んだため途中の上り坂でエンジンが悲鳴を上げた。チェンセーンから

チェンライ、チェンマイへと戻りここで解散・自由行動とした。

帰国したとき、クーラーが効き過ぎではないかと思ったら日本はまだ冬なのだった。春にはまだ少し遠かった。



おまけの写真

帰国後、留年者発表の掲示に自分の名前を見つけてしまう小島・・・留年だよ！留年！

会計報告	
成田ーバンコク往復航空券	56000円
海外旅行保険加入(30日)	1000円
空港使用料(成田)	2000円
神大ー成田空港往復	3920円
空港ーバンコク	5パーツ
バンコクーチェンマイ	151パーツ
宿泊費合計	345パーツ
パドル製作	96パーツ
公金(食料・水・ガイドなど)	約1500パーツ
(1パーツ=4円)	